

ブラジルに帰国した子どもたちの教育達成  
山本晃輔（人間科学研究科 教育文化学）

## はじめに

グローバル化した世界において国家間を移動し出生地ではない場所で生活することが珍しくなくなりつつある。国家間の移動も加速化し、これまでにない様相をみせている。移民の増加は国際社会における争点の一つになった。

本研究は様々な移民の中でも日系ブラジル人に注目した。日本とブラジルの間での人々の往来は1908年にはじまる。近年はブラジルの不況から、ブラジル移民らによる日本への再移動が（デカセギ）急増した。そして2008年はブラジル日本移民100年の記念すべき年であると共に、世界的な経済不況の影響で多くのブラジル人が日本からブラジルへと帰国した年となった。この100年の間、様々な理由により日本人/日系人/ブラジル人らは両国家間を往還してきたのである。

本研究はこうした日本とブラジルにおける人々の往還の中でも、とりわけ子どもたちに注目した。国家間を移動する、あるいは移動の可能性があるということが、子どもたちの教育達成にいかなるコンフリクトをもたらしているのか。日系ブラジル人の子どもたちの生活史を事例に、国家間を移動する子どもたちの複雑なライフスタイルの一側面について検討した。

## 調査枠組み

昨年度の調査では、帰国した子どもたちの実態を把握することに努め、二つの観点を導いた。第一に子どもたちの文化適応の複雑さである。同じ日系ブラジル人の子どもたちといっても、帰国後、順調に適応している子どもたちと苦戦している子どもたちもいれば、日本への帰国を望む子どもたち、そしてブラジルの下位文化に接続されていく子どもたちと様々である。このような文化適応に関する階層分化を考える上で参考になるのが、Portes(1995)やZhou(1997)らのSegmented Assimilationの議論である。とりわけほぼ同様の出自を持つ移民集団においても、二世代目の適応は受け入れ国の状況や一世の適応状況により階層分化していくという観点は参考になる（ただし本理論は移民の二世代目研究であり、定住した人々が前提となる。したがってこうした往還する人々をどの程度説明するかは限定的である）。

子どもたちの文化適応の関門のひとつが、その生活の大半を過ごす「学校」である。その学校に適応するため動員できるのが、第二の観点である「学校教育」であり、学力をはじめとした「文化資本」である。つまり、片方の国でうけた教育がもう片方の国では全く無駄になってしまう。子どもたちが身に付けた文化資本が、国家間移動をおこなうことで、無価値になる場合がみられる。ブルデューは文化資本論を「界（ジャン）」を前提に構築した。氏が指摘するように、界を越えた場合、全ての文化資本が有用になるわけではない。日系人らの移動は高い流動性の中にあり、場合によってはトランスナショナルな状況を見出すことができるが、教育においてはナショナルなものに規定されているのである。

二つの観点は将来展望/教育達成を考えた時に密接に関係している。なぜなら、文化適応がスムーズにいく子どもたちは、現地で将来を展望する。しかし、文化適応に苦しんでいるケースでは、自分の手持ちの資本が活用できていない。その場合、手持ちの資本を諦めて1から人生を設計しなおすか、その資本が通用する場所に移動するという戦略も取ることができるからである。

いずれにせよ、二つの国をまたいでいるにも関わらず「うまくいく/いかない」の違いが見られるのはなぜなのだろうか。そして子どもたちの将来展望と、目指される将来達成に大きな違いがみられるのはなぜか。本研究では上記二つの観点を設定し、日系ブラジル人らの適応と教育達成の在り方を探ることにした。

## 調査概要 : 2010/10/15~30

- ・ブラジル連邦共和国：パラナ州ロンドリーナ市、アサイ市、サンパウロ州バストス市
- ・前回調査と同じ場所を踏襲。一年間の変化を追うことを目標にしたが・・・
- ・前回調査で外国人学校在住の子どもたちが適応しやすいことはわかったので、今回は公立学校に通っていた子どもたちを中心に8家族30名のインタビューをおこなった。
- ・インタビューは簡易な調査表を作成しておこなったが、基本的には談話形式とし、ブラジルや日本での生活についてひろく話してもらうこととした。

## 分析結果

今回調査のインタビューデータと、過去3年間のデータをトランスクリプト化、Portesらの議論を参考にしながら4パターンに分類した。

### (1) 上昇

ササキ家：計画的な帰国。手に職（理髪店）をつけた父親。父親は日本で日系人向け理髪店をしていた。サブプライムショックで急ぎ帰国した。現在生活は安定している。長女は中学生になると、将来を見越してブラジル人学校へ転校、ポルトガル語を学んだ。ただし日本では学校卒業後、日本の大学には行けないので働くことになっていた。帰国後の学校生活に問題はない。日本ではいけないと考えていたブラジルの大学に進学できることになった。卒業して将来は服のデザイナーになりたいという。趣味の漫画やアニメはネットを通じて取得し、登場する服などをつくりたいという。ブラジルでの生活に満足しており日本にいるときより良かったという。

### (2) 現状維持

オオモト家：長男は小中と日本の公立学校に通っていた。部活ばかりしていた。中2で帰国。帰国後ポルトガル語はもちろん、勉強はなにもかもわからなかった。3回留年し、21歳でスペレチーボ2年生。現在の経歴ではブラジルでの就職が難しいと考え、大学進学を目指しているが不安が多い。友人もいないし、町が危険なので外出したくない。日本から沢山の小説を持って帰り、今でも日本のインターネットサイトを巡回している。時には日本の友人とスカイプで話すこともある。勉強するなら哲学がいい。「考えることならできる」から。

### (3) 逃避・回帰

ウエノ家：父親が何度か日本とブラジルを行き来し、長女が小学生に入るタイミングで日本へ。長女は日本で一生生活すると思っていたが中学校2年生で帰国することに。ブラジルではポルトガル語などに苦労しながらも教員養成の大学に進学を果たす。現在、大学卒業を目前にしているが、日本に帰国したいという。理由は、日本で学校生活を送りたかった。安全でいつでも自由に外出できる日本が良いから。ブラジルで苦労をするなら日本で苦労したいから。両親も娘の言うことならと認める方針。

### (4) 下降

シマノ家：日本生まれ。家族は四六時中残業で家にいなかった。長女は家にいることが嫌で外出を繰り返していた。高校に入るところには、地元のあまりガラの良くないグループに属していた。家族はサブプライムショックで失業、帰国しなくてはならなくなった。帰国後、両親は必死に仕事を探しているがなかなか定職がみつからなかった。長女は地元の私立学校に入るが、勉強がわからず学校に行くことはやめた。もちろん就職できるわけでもない。行く場所もなく、ブラジルの不良グループと毎日過ごしている。

## まとめ

- ・ブラジルの学校に適応できない子どもたちにとって、「諦める」か「日本に戻る」という選択肢が見えられた。子どもたちの将来選択のなかにちらつく「国家間移動」。
- ・メディアを通じて日本の情報を取得するなど、日本とのつながりを維持しようとしている。メディアを通じた「越境」はあるが、教育制度や教育カリキュラム上の「国境」には遮断されている。
- ・本調査で収集したデータから、子どもたちの適応や教育達成に強く影響を与えていると思われるのが、【言語】【将来展望】【生活の安定】である。しかしどれが決定的かといわれると難しい。
- \*いずれにしても「公立学校」出身者にとって、「ポルトガル語」と「ブラジル教育のカリキュラム」を補填することができれば、子どもたちは帰国後スムーズにブラジル教育に編入することができる。比較的、学校適応がうまくいっている子どもたちは家族がそれを「補填」している。
- \*「補填」できるのは経済的に優位な家庭や、日本ブラジルでの生活が安定している家庭である。フレキシブルな労働力として位置づけられる日系人は流動性が高く、生活の安定さが確保しにくい。現状では「補填」できる家庭とできない家庭との間に分化が起きている。
- ・子どもたちは日本の文化資本は持ち合わせている。しかしそれだけでは「日本」でしか生きていけない。したがってこれを適切に評価する仕組みが必要なのではないだろうか。日本の資本しかもたずに外国で生活することは不可能であるし、限定的なものとならざるを得ない。外国の紙幣と同じく、外国で使用するには両替をおこなわなくてはならないが、教育達成という点から考えた時、より適切なのは両替すること「なく」、両国家間で通用できるようにすることだと思われる。